

【資料】

新型コロナウイルス感染症流行下における保護者や保育者のマスク着用による乳幼児への影響と対応に関する文献研究

Literature Review of the Effects and Support of Face Mask Usage by Parents and Caregivers on Infants during the COVID-19 Pandemic

佐々木綾子, 近澤 幸, 笹野 奈菜
間中麻衣子, 竹 明美

Ayako Sasaki, Sachi Chikazawa, Nana Sasano
Maiko Manaka, Akemi Take

キーワード：新型コロナウイルス感染症，マスク，乳幼児，影響

Key Words : covid-19, face mask, infant, influence

I. はじめに

新型コロナウイルス感染症（COVID-19; Coronavirus Disease 2019）は、2020年に世界各地で感染が拡大した。日本では、第1波から7波が確認され、感染拡大防止対策およびこれまで4回の緊急事態宣言発出、2回のまん延防止等重点措置がとられた（厚生労働省、2022a）。ワクチン接種については、日本でも2021年2月以降、医療従事者等や、高齢者からワクチン接種が開始され、接種率（2022年10月14日時点）は、3回接種完了者が65.6%となっている（首相官邸、2022）。しかし、いまだ完全な収束には至っていない。

新型コロナウイルス感染症の拡大は、乳幼児を養育する保護者、保育者、乳幼児自身にも多大な影響を及ぼした。なかでも感染防止のためのマスクの着用は、日本において長期化している。マスクの着用が日常となった今、目の前の他者の表情は覆い隠され、子どもたちは表情を経験する機会を急激に減らしていることから、特に、脳発達の感受期にあ

る子どもたちの脳と心の発達になにかしらの影響が生じるリスクの可能性が指摘されている（明和、2021a）。

また、麻生（2022）は、常時マスクを着用し、人とソーシャルディスタンスをとる生活を余儀なくされていることについて、このような人間同士の物理的な隔たりが、子どもや親、家族の心のつながりにどのような影響をもたらすのかについて疑問を呈している。

感染状況とマスクをめぐるこれまでの厚生労働省の方針を図1に示した。世界保健機構（以下WHO；World Health Organization）が2020年2月、せきやくしゃみといった症状がない人は予防目的で学校や駅、商業施設など公共の場でマスクを着用する必要はないとした（東京新聞、2020）。しかし、2020年6月5日には新型コロナウイルスの感染予防のためのマスク着用について指針を改定し、感染が拡大する地域で人と人との距離がとれないときに、一般に広く着用するよう推奨した。そして、健康な

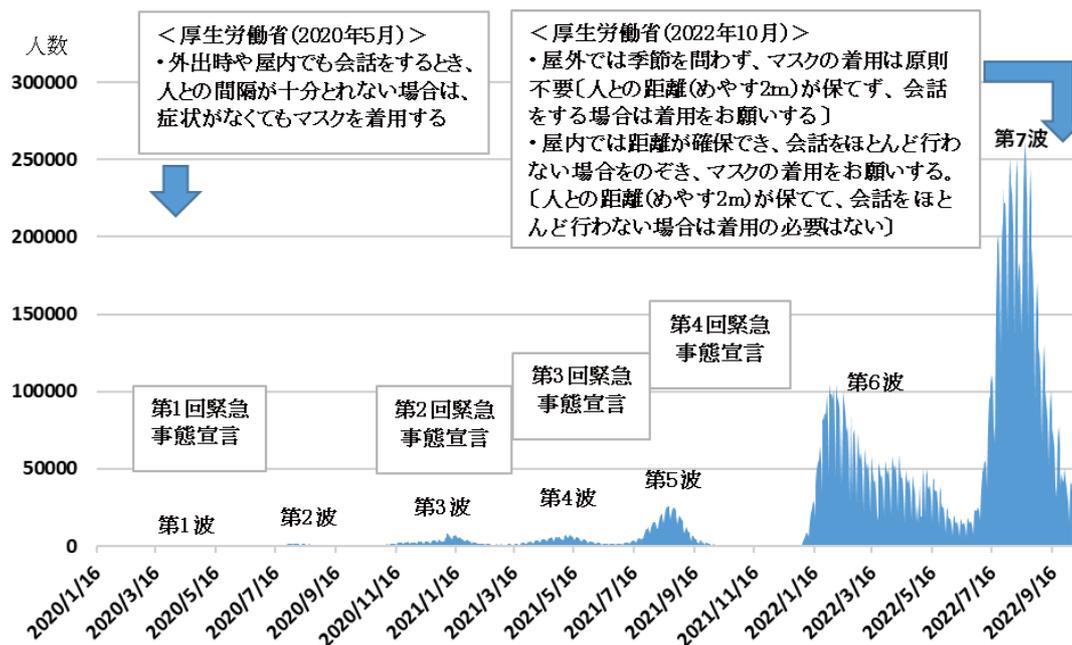


図1 新型コロナウイルス感染症感染状況とマスク対応の推移
 [厚生労働省 (2022a), 首相官邸 (2022) をもとに作成]

人の着用を奨励していなかった姿勢を改めた (朝日新聞, 2020)。

日本では、感染拡大当初から、外出時や屋内でも会話をするとき、人との間隔が十分とれない場合は、症状がなくてもマスクを着用することが推奨された (厚生労働省, 2020a)。2022年10月31日現在、屋外では季節を問わず、マスクの着用は原則不要 [人との距離 (めやす2m) が保てず、会話をする場合は着用を推奨]、屋内では距離が確保でき、会話をほとんど行わない場合を除き、マスクの着用を推奨、[人との距離 (めやす2m) が保てて、会話をほとんど行わない場合は着用の必要はない] とされている (厚生労働省, 2022b)。

一方、日本で「公共の場ではマスクを着用する」と回答した人の割合は、2021年4月は89%、2022年4月も87%と、前回レポートの期間 (2020年12月～2021年12月) と同様に、この1年間85%以上の高い水準で横ばいとなっている (日本リサーチセンター, 2022)。欧米・欧州地域では2021年12月、2022年1月頃から急激に減少し (日本リサーチセンター, 2022)、現在ではさらに減少していると推察される。日本でも、2022年10月に入り、世界と

歩調を合わせたルール化の検討をしていることが明らかにされたが、具体的には提示されていない。

しかし、長引く日本のマスク生活は、乳幼児の愛着形成や発達に影響を及ぼす可能性が考えられる。看護職は妊娠、分娩、産褥、育児期を通して、乳幼児の愛着形成や発達に関わる重要な職種の一つである。乳幼児への明らかな影響が起こってからでは遅く、影響や対応策を明らかにすることは重要である。

そこで、新型コロナウイルス感染症流行下における保護者や保育者のマスク着用による乳幼児への影響と対応に着目し、文献検討により明らかにしたいと考えた。これらについて現時点でどのように考えられているのかを明らかにすることは、新型コロナウイルス感染症と共存することが求められている社会における、支援のあり方や今後のパンデミック時の対応の基礎資料になると考える。

II. 研究目的

新型コロナウイルス感染症流行下における保護者や保育者のマスク着用による乳幼児への影響と対応について文献検討により明らかにする。

Ⅲ. 研究方法

1. 文献検索の方法

日本と海外では、感染状況・対策が異なっているため、まずは国内文献を対象とした。医学中央雑誌WEB版、CiNii、ハンドサーチにより新型コロナウイルス感染症、マスク、発達をキーワードとし、2020年から2022年に発表された文献（会議録除く）を検索した（2022年9月30日検索）。その結果、24件が該当した。その中で、タイトルおよび抄録から、新型コロナウイルス感染症流行下における保護者や保育者のマスク着用による乳幼児への影響と対応について記載された文献10件を抽出し分析対象とした（図2）。

2. 用語の定義

- 1) 乳児：「生後1年未満の児」とした。
- 2) 幼児：「満1歳から小学校就学までの児」とした。
- 3) マスク：「目から下の顔の一部を覆うもの」とした。

3. 分析方法

調査研究論文、解説論文に分け、調査研究はタイトル、著者、掲載誌、論文種類、内容〔①目的、②方法（対象・調査時期・調査方法）、③影響、④対策と今後の課題〕、解説はタイトル、著者、掲載誌、論文種類、内容（①影響、②対策と今後の課題）、

についてマトリックス表を作成した。また、文献種別では解説であったが、内容に調査研究を含む1件は調査研究に含めた。影響については1) マスク着用の実態への影響、2) 愛着形成への影響、3) コミュニケーション・共感性の発達への影響、4) 咀嚼力の発達への影響、5) 言語発達への影響、対応については1) 継続調査の必要性、2) 具体的な対応に分類し分析した。

4. 倫理的配慮

公開情報に基づく研究であり、著作権法の範囲内で文献複写を行い、出所を明示した。

Ⅳ. 結果

分析した10件の概要について表1と表2に示した。

1. 研究の動向

調査研究論文の対象者は5件とも保育者であった。保護者を対象とした調査はなかった。地域は、全国2件、一部の地域3件であった。調査時期は2020年5月～2021年3月で第3波、2回目の緊急事態宣言が発令され、一般へのワクチン接種も開始される以前であった。調査方法はWEBまたは紙による質問紙調査、インタビュー調査であった。

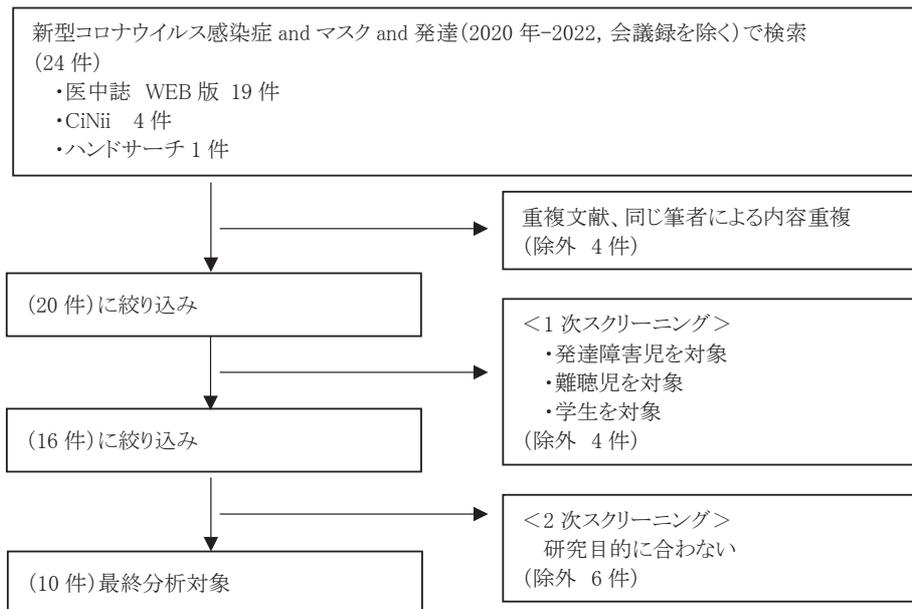


図2 文献選定プロセス

表1 調査研究

N	①タイトル	①目的
0	②筆頭著者	②方法 (対象・調査時期・調査方法)
	③掲載誌	③影響
	④論文種類	④対策や今後の課題
1	①保育者のマスク着用が保育や子どもに与える影響 - COVID-19 禍による ②七木田方美 ③保育と保健, 27 (1), 13-17 (2021) ④原著論文 調査研究	①COVID-19 禍におけるマスク着用の子どものおおよび保育への影響について ②対象: H 県内の 4 地域で実施された保育に関する研修会に参加した保育者および保育施設従事者 138 名, 調査時期: 2020 年 7 月 11 日から 12 月 1 日, 調査方法: Web 調査 ③・乳児の変化: 保育者のマスク着用における乳児の変化 乳児クラスにおいて「変化があると強く感じている」「変化があると感じている」とした保育者は, 65%以上。また, 乳児に限らず, 「子どもの反応が乏しくなった」と感じている保育者が 63%おり, 他にも「話したり歌ったりすることが減った」「大人しくなった」「人見知りしない」等の変化を感じている保育者が多数いた。 ・嚥下や言葉への影響: 「食事」は咀嚼嚥下機能の発達および発音とも関連するため, 子どもの誤嚥や言葉の発達の遅れといった問題が生じる可能性が考えられる。 ④COVID-19 流行を抑える一方で, 乳幼児期の子どもの発達に与える影響については継続調査が必要。
2	①新型コロナウイルス感染症 COVID-19 の中での保育施設の課題 ②横井良憲 ③愛知教育大学教職キャリアセンター紀要, 6, 19-26 (2021) ④調査研究	①COVID-19 の影響下で保育者がどのようなことに困り, それが危機管理上どのような意味をもつのか明らかにする ②対象: 愛知県, 神奈川県, 岐阜県, 広島県にある, 7 か所の保育施設に勤務する保育者, 調査時期: 第 1 期 2020 年 5 月, 第 2 期 7 月, 調査方法: インタビュー調査 ③共通して複数施設が挙げているカテゴリーは<感染症対策><休園等による子どもの姿の変化><行事の見直し><マスクにより保育者の表情を子どもに見せられない>の 4 つ。「マスクを使うようになって, 表情を隠すと問題点がわかった」「子どもとのスキンシップを考えるとマスクをしていると表情が伝わりにくいこと, 言葉を覚えていく中で, 口元が見せられないのが困っている」などの語りがあった。 ④・感染症対策と理想の保育の間で葛藤する保育者の苦悩も語られた。<マスクにより保育者の表情が子どもに見せられない>においてもこの葛藤は存在し, 危機管理上の最重要課題である子どもの安全確保と理想とする保育の両立の難しさが, これら困りごとを生み出していることが示唆された。 ・保育施設で長期的に, 保育者の口元がマスクなどで隠されたままであることが, 子どもにどのような影響を与えるのか, 今後のさらなる研究が期待される。
3	①保育者たちが振り返る “COVID-19 パンデミック” の 1 年 ②及川智博 ③北海道大学大学院教育学研究紀要, 140, 117-154 (2022) ④速報 調査研究	①新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) のパンデミックの 1 年目の終わりに, 保育者たちがその 1 年間の保育について, 何をどう振り返ったかを検討 ②対象: 29 の都道府県に在住する保育者 191 名, 調査時期: 2021 年 3 月 7 日~31 日, 調査方法: Web 調査 ③各群に特徴的な頻出語として, 若手・中堅保育者と熟練保育者には共通して「マスク」が, あげられた。 ・保育者のマスク着用の弊害は, 保育者自身の健康被害とともに, 社会・言語的発達期にある乳幼児にとって表情認知を難しくするのではないかと, 聴覚的に知覚する音声と視覚的に知覚する口唇部の運動・形態との認知的統合を阻害するのではないかと懸念が生じていた。 ④保育者のマスクの乳幼児への影響については, 乳幼児発達の多くの専門家がメディア等で懸念を表明しているものの, 発達科学的な実証知見として確認されているとは言えない。
4	①保育者のマスク着用が, 子どもとのコミュニケーションに及ぼす影響について ②下里里枝 ③教育総合研究叢書, 15, 57-64 (2022) ④学術論文 調査研究	①保育者のマスク着用が長期化しており, 保育場面において, 子どものコミュニケーションや発達に影響がないかを検討 ②対象: 関西国際大学の系列の幼稚園 1 園, 保育所 3 園の保育者 63 名, 調査時期: 記載なし, 調査方法: 質問紙調査 ③保育者のマスク着用が長期化することについて, 保育者のマスク着用は, 表情や口元がマスクで隠れているので, 子どもとのコミュニケーションに困難をきたしていることが明らかになった。 【乳児の場合】 ・0 歳児は, 入園当初から保育者がマスクを着用していて, 保育者の顔が認識できにくいので, マスクを外すとまず驚いた顔をしてしまう。泣き出す子どももいる。 ・保育者の細やかな表情の変化等は伝わりにくいと思う。 ・乳児はこの 2 年間, 保育者のマスク姿しか知らない。複雑な気持ち。 ・これから言葉を覚えていく乳児は, 口の動きを見て覚えるのでマスクをしてはそれができない。 【発達への不安】 言葉: 子どもが大人の口元を見ないことが, この先子どもの発達に何か良くない影響がでるよう感じる。 表情とコミュニケーション: ・表情を見て, 笑っている, 喜んでいて, 悲しんでいると言った姿を読み取る力が乏しくなるのではないかと。

-
- ・笑顔が見えにくく、ほめられた時の喜びが少ない。
 - 愛着関係: 大人の顔の目の部分しか見えていないのは表情がわかりにくく、子どもとの愛着関係や信頼関係ができるのに時間がかかると感じる。
 - 【感染予防のために仕方がないのか】
 - ・子どもに感染させないために、現状では仕方がない。
 - ・保育者のマスク着用が子どもの発達に影響を及ぼすとは思えない。
 - 【対策】
 - ・透明のマスクであれば子どもが保育者の口元が見えるので今よりは改善されるのでは。
 - ・マスクの種類で、口元に空間ができる立体形状のマスクであれば聞き取りやすいのではないかと。
 - 【マスクなしで保育したい】
 - ・大切な話をする時には一時的にマスクを外したいと思う。
 - ・マスクなしで保育をしたい。子どもに保育者の表情を見せることは大切だと思う。
 - ④今後の対策として、保育者が子どもとのコミュニケーションに工夫を凝らすことが求められている。
-
- 5 ①保育・幼児教育施設における新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響についての検討 2020年度・2021年度の動向と調査結果から
②野澤祥子
③東京大学大学院教育学研究科紀要, 61, 331-351 (2022)
④解説 (調査研究含む)
- ①COVID-19の影響に対する保育・幼児教育の対応や影響についてより詳細に検討。
 - ②対象: 全国11自治体内にある保育所・認定こども園280園の保育者1279名, 調査時期: 2020年12月~2021年3月, 調査方法: 無記名の質問紙調査 (紙版)
 - ③・9割以上の保育者が通常のマスクを着用。いずれのクラスでも「保育中は常にマスクをしている」が最多で6~7割程度。「保育中, 必要に応じてマスク等はずす」と回答した人も2~4割程度。
 - ・マスクの種類は「通常のマスク (口元が見えない)」が93.9%, 「口元が見えるマスクやマウスシールド」が0.2%であった。
 - ・必要に応じてマスク等はずすと回答した377名は「子どもに保育者が話す口の動きを見せたい時」は, いずれのクラスでも4~6割程度が選択。
 - ・「子どもに保育者の表情を見せたい時」もいずれのクラスも約4割程度あるいはそれ以上が選択していたが, 特に2歳児クラスでは65.4%と最多。
 - ・「子どもに伝えたいことが伝わっていないと感じる時」は, 0歳児・1歳児では低く, 2歳児以上で5~7割程度が選択。特に, 3歳児・4歳児・5歳児クラスでは最も多く選択。「食事中に食べ方や口の動かし方を伝える時 (「もぐもぐ」など)」については, 0歳児クラスが86.0%を占め, 最多。咀嚼や嚥下の発達が著しい離乳食期に, 子どもの食事中にマスクをはずす必要性を高く感じている保育者がいることがうかがわれる。
 - ④・感染予防対策のために原則的に保育者のマスクの着用が求められるが, 厚生労働省の通知では表情によるコミュニケーションの重要性が改めて指摘されている。
 - ・保育者のマスク着用による子どもの発達への影響について, 実証的に検討することが今後の課題。
-

2. マスクの影響

1) マスク着用の実態への影響

9割以上の保育者が通常のマスクを着用していた。いずれのクラスでも「保育中は常にマスクをしている」が最多で6~7割程度だったが, 「保育中, 必要に応じてマスク等はずす」と回答した人も2~4割程度みられた。マスクの種類は「通常のマスク (口元が見えない)」が93.9%, 「口元が見えるマスクやマウスシールド」が0.2%であった。必要に応じてマスク等はずすと回答した377名は「子どもに保育者が話す口の動きを見せたい時」は, いずれのクラスでも4~6割程度がマスク等はずすことを選択していた。「子どもに保育者の表情を見せたい時」もいずれのクラスも約4割程度あるいはそれ以上がマスク等はずすことを選択していたが, 特

に2歳児クラスでは65.4%と最多であった (調査5) (野澤他, 2022)。

2) 愛着形成への影響

大人の顔の目の部分しか見えていないのは表情がわかりにくく, 子どもとの愛着関係や信頼関係への懸念 (調査4) (下里, 2022), すべての保育士が, 同じようにマスクをしている保育環境では, 乳児が, 愛着を結ぶべき担当の保育士を特定することが困難であるため, 愛着の絆が軽薄化しないための工夫や対応が必要と考えていた (解説8) (澁井, 2021)。

3) コミュニケーション・共感性の発達への影響

保育者がマスクをした状態が日常的にかつ長期化する, 様々な感情や情緒による表情の変化を認識する体験を重ねることが難しく, 表情から相手の感情や情緒をくみ取る能力や, 感情を共有する共感性

表2 解説論文

N 0	①タイトル②筆頭著者 ③掲載誌 ④論文種類	①影響 ②対策や今後の課題
6	①新型コロナウイルスと心理職 子ども・家族のケアを考える 「コロナ禍」と子育て支援現場のこれから ②青木紀久代 ③子育て支援と心理臨床, 19, 7-10(2020) ④解説	①乳児院での発達への影響:多くの乳児院では,24時間職員が養育に当たっている。(中略)感染予防を徹底しないと,施設内でクラスターが発生した場合,職員が誰一人養育に関わることができなくなってしまう。ただ,子どもは,この間マスクを外した大人を見る機会が奪われてしまった。乳児,言葉を覚え始めの誕生日前後の乳児たちにとって,感染の予防と発達の保証をどうバランスをとっていかを施設全体で判断していく必要がある。
7	①【進化するヒト～変貌する社会と変わりゆく身体～】行動様式の進化と環境のかかわりコロナ後の新しい生活様式の探求とその着眼点 ②松村秋芳 ③子どもと発育発達,19(2),116-122(2021) ④解説/特集	①・マスクは口元が隠れることでコミュニケーションの欠如がもたらされるなどのデメリットがあることも確かである。 ・その欠如を目による信号の伝達によってすぐ置き換えられるかという,文化による差や個人差もあるのでなかなか難しい。
8	①コロナ禍における保育園での乳児保育に寄せて ②澁井展子 ③東京都医師会雑誌,74(6),476-479(2021) ④解説	①・愛着形成への影響:愛着の絆を形成するうえで問題が生じることも懸念される。また,すべての保育士が,同じようにマスクをしている保育環境では,乳児が,愛着を結ぶべき担当の保育士を特定することが,困難であるかと思われる。愛着の絆が軽薄化しないための工夫や対応が必要。 ・共感性の発達への影響:保育士がマスクをした状態が日常的にかつ長期化すると,様々な感情や情緒による表情の変化を認識する体験を重ねることが難しく,表情から相手の感情や情緒をくみ取る能力や,感情を共有する共感性の発達に問題が生じることが懸念される。 ・咀嚼力の発達への影響:養育者がマスクをした状態で離乳食の介助を行っても,口の形や動きを見せることができないため,咀嚼能力の発達を促すことが困難となる状況が生まれる可能性がある。 ・言語発達への影響:マスクを通してでは,保育士の声や言葉は不明瞭であり,また口の動きをマネしながら言語を獲得していくことが困難となる可能性が生じる。 ②・少なくとも哺乳乳や離乳食の介助,語りかけるときは,感染に配慮しながらもアクリル板やフェイスマスクを活用し,保育士の表情を見せる。 ・マスクをして保育にあたる場面では,頻りに語りかける,肌のぬくもりや匂いが伝わるようにしっかりと抱擁する,しっかりと目を見つめあうなど,乳児が深い安堵感と幸福感をえるための工夫や対応が必要。 ・家庭で過ごす時間は,いつも以上に愛着を深めることができるよう,母子間の双方向性の細やかで濃密な交流が望まれる。 ・透明マスク:発達への影響を最小限とするための対応策の一つとして,透明フィルムを用いたマスク「見えるマスク」が,将来を担う子どもたちのために,公費で無料配布されることが期待される。
9	①With & After コロナ禍での育児(第4回)(最終回)コロナ禍で子どもの育ちを支える取り組み ②西館有沙 ③臨床助産ケア:スキルの強化,14(1),65-69(2022) ④解説	②・感情のやり取りの工夫:保育者は,声に抑揚をつけたり,リアクションをオーバーにとったりするなど,マスクをしていても子どもと感情のやり取りができるように工夫する。 ・透明素材のマスク:マスクを着用する子ども同士のやり取りを支え,マスクで表情の一部が隠れることによりデメリットを最小限に抑えることが,この時期において必要な対応である。口の動きや口元の表情が見えるマスクを試してみることも有効な対策のひとつ。
10	①【コロナ禍の子どもたち】コロナ禍でのヒトの脳と心の発達 ②明和政子 ③チャイルドヘルス,25(2),99-102(2022) ④解説/特集	①共感性への影響:乳児は相手の「動く」表情を豊かに目にしながら,相手の顔を認識したり,その人の感情を理解したり共感したりする能力を発達させていく。 ・言語獲得への影響:だれかが話している場面では,目だけでなく,声が発せられる口の動きにも注意をむける。これらの表情を結び付け,自分でも真似してみることによって,言語を獲得していく。 ・マスクの着用が日常となった今,目の前の他者の表情は覆い隠され,子どもたちは表情を経験する機会を急激に減らしている。特に,脳発達の感受期にある子どもたちの脳と心の発達になにかしらの影響が生じるリスクがないとはいえない。 ②・身体接触:できるだけ,できる範囲において,他者との身体接触を経験できる時空間を子どもたちに提供していく。 ・透明素材のマスク:子どもたちに対面する場面では透明素材のマスクをできるだけ着用する。 ・家庭内での表情豊かなコミュニケーション:家庭内でも子どもたちに表情をみせるコミュニケーションの機会を意識的,積極的に増やす。

の発達に問題が生じることが懸念されていた(解説8)(澁井, 2021)。

保育者のマスク着用における乳児の変化では、乳児クラスにおいて「変化があると強く感じている」「変化があると感じている」とした保育者は、65%以上であった。乳児に限らず、「子どもの反応が乏しくなった」と感じている保育者が63%おり、他にも「話したり歌ったりすることが減った」「大人しくなった」「人見知りしない」等の変化を感じている保育者が多数いた(調査1)(七木田, 2021)。保育者は「0歳児は、入園当初から保育者がマスクを着用していて、保育者の顔が認識できにくいので、マスクをはずすとまず驚いた顔をしてしまう。泣き出す子どももいる。保育者の細やかな表情の変化等は伝わりにくい。乳児はこの2年間、保育者のマスク姿しか知らない」と述べていた(調査4)(下里, 2022)。また、「子どもに伝えたいことが伝わっていないと感じる時」は、0歳児・1歳児では低く、2歳児以上で5～7割程度が選択していた。特に、3歳児・4歳児・5歳児クラスでは最も多く選択されていた(調査5)(野澤他, 2022)。

さらに、保育者のマスク着用が長期化することについて、保育者のマスク着用は、表情や口元がマスクで隠れているので、子どもとのコミュニケーションに困難をきたしていることを報告していた(調査4)(下里, 2022)。

4) 咀嚼力の発達への影響

咀嚼や嚥下の発達が著しい離乳食期に、子どもの食事にマスクをはずす必要性を高く感じている保育者がいることがうかがえた(調査5)(野澤他, 2022)。「食事」は咀嚼嚥下機能の発達および発音とも関連するため、子どもの誤嚥や言葉の発達の遅れといった問題が生じる可能性を懸念していた(調査1)(七木田, 2021)。

また、養育者がマスクをした状態で離乳食の介助を行っても、「口の形や動きを見せることができないため、咀嚼能力の発達を促すことが困難となる状況が生まれる可能性がある」と述べていた(解説8)(澁井, 2021)。

5) 言語発達への影響

「読み聞かせや歌といった活動」に関する記述には、言葉を使い覚えることへの影響を懸念する報告があった(調査1)(七木田, 2021)。

共通して調査対象とした複数施設があげているカテゴリーの一つに、マスクにより保育者の表情を子どもに見せられない、があった。「マスクを使うようになって、表情を隠すと問題点がわかった」「子どもとのスキンシップを考えるとマスクをしていると表情が伝わりにくいことと、言葉を覚えていく中で、口元が見せられないのか困っている」などの語りがあった(調査2)(横井, 2021)。

また、保育者のマスク着用の弊害は、保育者自身の健康被害とともに、社会・言語的発達期にある乳幼児にとって表情認知を難しくするのではないかと、聴覚的に知覚する音声と視覚的に知覚する口唇部の運動・形態との認知的統合を阻害するのではないかと懸念が生じていた。後者の影響については、乳幼児発達の多くの専門家がメディア等で懸念を表明しているものの、発達科学的な実証知見として確認されているとは言えないと述べていた(調査3)(及川, 2022)。

これから言葉を覚えていく乳児は、口の動きを見て覚えるのでマスクをしてはそれができない、子どもが大人の口元を見ないことが、この先子どもの発達に何か良くない影響がでるようになっていくことを報告していた(調査4)(下里, 2022)。

マスクを通してでは、保育士の声や言葉は不明瞭であり、また口の動きをマネしながら言語を獲得していくことが困難となる可能性が生じると述べていた(解説8)(澁井, 2021)。

さらに、乳児院での発達への影響において、多くの乳児院では、24時間職員が養育に当たっているが、感染予防を徹底しないと、施設内でクラスターが発生した場合、職員が誰一人養育に関わることができなくなってしまう。しかし、子どもは、この間マスクをはずした大人を見る機会が奪われてしまったため、乳児、言葉を覚え始めの誕生日前後の乳児たちにとって、感染の予防と発達の保証をどうバランスをとっていくかを施設全体で判断していく必要が

あると報告していた(解説6)(青木, 2020)。

マスクは口元が隠れることでコミュニケーションの欠如がもたらされるなどのデメリットがあることも確かである。その欠如を目による信号の伝達によってすぐ置き換えられるかという点、文化による差や個人差もあるのでなかなか難しいことや(解説7)(松村, 2021)、マスクの着用が日常となった今、目の前の他者の表情は覆い隠され、子どもたちは表情を経験する機会を急激に減らしている。特に、脳発達の感受期にある子どもたちの脳と心の発達になにかしらの影響が生じるリスクがないとはいえない状況にあることが懸念されていた(解説10)(明和, 2022a)。

3. 対応

1) 継続調査の必要性

新型コロナウイルス感染症流行を抑える一方で、乳幼児期の子どもの発達に与える影響については明らかになっていないことから、継続調査が必要であると述べていた(調査1)(七木田, 2021)。また、感染症対策と理想の保育の間で葛藤する保育者の苦悩も語られた。〈マスクにより保育者の表情を子どもに見せられない〉においてもこの葛藤は存在し、危機管理上の最重要課題である子どもの安全確保と理想とする保育の両立の難しさが、これら困りごとを生み出していること、保育施設で長期的に、保育者の口元がマスクなどで隠されたままであることが、子どもにどのような影響を与えるのか、今後のさらなる研究が期待されると述べていた(調査2)(横井, 2021)。

2) 具体的な対応

(1) 身体接触

他者との身体接触を経験できる時空間を、子どもたちに提供していくことの必要性が述べられていた(解説10)(明和, 2022a)。

(2) 感情のやりとりの工夫

乳幼児は周りの大人が応答的にかかわることでコミュニケーションの楽しさを知り、大人や友達と意思を共有する経験を積む時期である。そのため感情のやりとりの工夫として保育者は、声に抑揚をつけたり、リアクションをオーバーにとったりするなど、

マスクをしていても子どもと感情のやり取りができるように工夫しながら関わることの重要性を述べていた(解説9)(西館, 2022)。

(3) 透明マスクの使用

子どもが保育者の口元が見えること、マスクの種類で、口元に空間ができる立体形状のマスクであれば聞き取りやすいのではないかと述べていた(調査4)(下里, 2022)。少なくとも哺乳や離乳食の介助、語りかけるときは、感染に配慮しながらもアクリル板やフェイスマスクを活用し、保育士の表情を見せること、またマスクをして保育にあたる場面では、頻回に語りかける、肌のぬくもりや匂いが伝わるようにしっかりと抱擁する、しっかりと目を見つめあうなど、乳児が深い安堵感と幸福感をえるための工夫や対応が必要と述べていた。そして、家庭で過ごす時間は、いつも以上に愛着を深めることができるよう、母子間の双方向性の細やかで濃密な交流、発達への影響を最小限とするための対応策の一つとして、透明フィルムを用いたマスク「見えるマスク」が、将来を担う子どもたちのために、公費で無料配布されることを期待していた(解説8)(澁井, 2021)。

透明素材のマスクを着用する子ども同士のやり取りを支え、マスクで表情の一部が隠れることによりデメリットを最小限に抑えることが、この時期において必要な対応と述べていた(解説9)(西館, 2022)(解説10)(明和, 2022a)。

(4) 家庭内での表情豊かなコミュニケーションの必要性

家庭内でも子どもたちに表情を見せるコミュニケーションの機会を意識的、積極的に増やすことも有効と述べていた(解説10)(明和, 2022a)。

V. 考察

1. 研究動向

調査研究対象者は5件とも保育者であった。保育所は、児童福祉法第39条の規定に基づき、保育を必要とする子どもの保育を行い、その健全な心身の発達を図ることを目的とする児童福祉施設であることから(厚生労働省, 2020b)、マスクの乳幼児への影響に関する論文が多かったと考えられた。保護

者を対象としたインターネット報告では(カラダノート, 2022), 子どものマスク着用に対し不安と回答したのは66%で具体的には「表情が読み取れないなど発育への影響」があげられているが, 研究報告としては見当たらなかった。保護者を対象とした研究が課題といえよう。

地域は, 全国2件, 一部の地域3件であったため, わが国全般の結果ではないが, 調査時期は2020年5月～2021年3月で, いずれも度重なる緊急事態宣言発令の中, ワクチン接種も開始される以前であったことから, 先が見えず新型コロナウイルスへの不安が高かったことが結果に影響していると考えられた。

2. マスクの影響

1) 実態

9割以上の保育者が通常のマスクを着用し, 「口元が見えるマスクやマウスシールド」が0.2%と低率であった。4～6割が必要に応じてマスク等はずしていった。保育現場のマスク着用についてはガイドブックにも着用が推奨されている(全国保育園保健師看護師連絡会, 2021)。

一方, 日本小児科学会(2021)では, マスクなどの着用で, 表情が見えにくくなることによる弊害も懸念されることを報告している。また, 厚生労働省(2022c)は, 保育士がマスクを着用するに当たって注意すべき点について, 感染防止対策は重要であるが, 表情によるコミュニケーションの重要性を指摘する声もあると述べている。さらに, 日本小児感染症学会(2022)は, 表情によるコミュニケーションもとても大切である, 様々な保育の場面では, マスク着用が困難場合や, 口元も含めた表情を見せることが望ましい場合もある, と述べている。

これらのことから, 指針を守りつつ, 保育者が口の動きや表情を見せることに留意していたと考えられた。

2) 影響

愛着形成, コミュニケーション・共感性の発達, 咀嚼力の発達, 言語発達への影響が示唆された。その理由として, 保育者のマスク着用は表情がわかりにくく, 表情や口元がマスクで隠れているため, 子

どもとのコミュニケーションに困難をきたしていたこと, また, 表情を見て, 読み取る力が乏しくなることがあげられた。また, 口の形や動きを見ることができないため, 咀嚼能力の発達を促すことが困難となることや, 言語発達への影響があげられていた。

さらに, マスクの着用は表情認知を難しくし, 聴覚的に知覚する音声と視覚的に知覚する口唇部の運動・形態との認知的統合を阻害するのではないかという懸念が指摘されていた。特に, 乳児院では感染予防が徹底されていることから, 影響が大きいことが考えられた。

乳児は, 相手の表情が豊かに動くのを目にする社会的環境の中で, 相手の顔を認識したり, その人の感情を理解したりする能力を発達させていくため, 誰かが話している場面では, 目だけでなく, 声が発せられる口の動きにも注意を向ける。そして, 視覚と聴覚の情報を結び付け, 自分でも真似してみることによって言語を獲得していく。しかしマスクの着用が日常となった今, 目の前の他者の表情は覆い隠され, 乳児は学びの機会を急激に減らしている。「マスクをしていても目でコミュニケーションはできるから大丈夫」と考えてしまうのはすでに完成した脳を持つ大人目線の解釈でしかないと危機感を報告している(明和, 2021b)。

一方で, 乳幼児発達の多くの専門家がメディア等で懸念を表明しているものの, 発達科学的な実証知見として確認されているとは言えない乳幼児期の子どもの発達に与える影響については継続調査が必要と考えられていた。

国外の報告では, イタリアで3歳から5歳, 6歳から8歳, 18歳から30歳を比較したところ, 顔を遮るマスクは, すべての年齢の人々が顔の特徴によって表現される感情を推測する能力を制限するが, マスクの使用に関連する困難は, 3～5歳の小児において顕著であることが報告されていた。そして, マスクの使用の真の影響を評価するために幼児の将来の社会的能力を監視する必要があると述べていた(Gori et al., 2021)。

さらに, 感染症予防のための公衆の面前でのフェ

イスマスク着用が小児および青年の心理社会的発達に及ぼす影響に関する系統的レビュー文献では (Freiber, et al., 2021), 13文献を検討したところ小児および青年の異なる発達領域に対するマスク着用の影響に関する証拠はほとんど得られなかった。心理的発達, 言語発達, 感情発達, 社会的行動, 学校の成果, および参加に関する研究データが不足していたため, さらなる定性的研究と疫学的研究が必要と述べていた。

以上のことから, 影響についてはいまだエビデンスは得られていないものの, 日本はマスク生活が長引いていることから, 考える影響を予防することは重要である。

3. 対応

影響をふまえた対応として以下の4点があげられた。

- 1) 身体接触: できるだけ, できる範囲において, 他者との身体接触を経験できる時空間を子どもたちに提供していく。
- 2) 感情のやりとりの工夫: 声に抑揚をつけたり, リアクションをオーバーにとったりする。
- 3) 透明素材のマスク: 子どもたちに対面する場面では透明素材のマスクをできるだけ着用する。アクリル板やフェイスマスクを活用し, 保育士の表情を見せる。
- 4) 家庭内での表情豊かなコミュニケーション: 家庭内でも子どもたちに表情を見せるコミュニケーションの機会を意識的, 積極的に増やすことも有効である。

麻生 (2022) は親子の身体接触の効果について, 子どもに対する身体接触は, ストレスの調整や情動調性および睡眠と覚醒の調整, 持続的探索の促進, 体重増加など様々な側面で有効性が報告されていること, 親子の身体接触を介する相互作用は, 子どもの愛着形成を促進すると述べていた。このため, 身体接触を促すことは, コミュニケーションの機会につながると考えられた。

また, 透明素材のマスクなどについては, 表情が見えることにより感情のやり取りや, 母子間の双方向性の細やかで濃密な交流につながることがあげら

れた。表情豊かなコミュニケーションの効果については, 明和 (2021a) が述べるように, 大脳皮質にある視覚野や聴覚野は, 比較的早期に成熟する脳部位であり, 特に, 感受期である生後数か月ごろから, 環境の影響を受けて変化し, 就学を迎えるころまでに成熟することが背景として考えられた。

4. 看護への提言

以上の結果, 考察をふまえ, 看護職で可能な支援にどのように生かせるかについて述べる。1) 親のマスク着用による乳幼児への影響に対する認識を把握し, 最新の正しい情報提供により心配事を軽減すること, 2) 看護者が親に, 出産における退院指導, 母児の健康診査時, 具体的対応策を説明し, 日常生活や絵本の読み聞かせの時, リアクション (表情や反応) をオーバーにすること, 親は表情豊かに子どもと会話する機会を意識的, 積極的に増やすこと, 手に入るようであれば口の動きや口元の表情が見える透明素材のマスクの使用を勧める。また, 長引くマスク着用による乳幼児への影響と対応に関する臨床現場の看護職や地域母子保健を担う看護職, 保育者への情報提供と啓発, などが考えられた。

VI. 研究の限界と今後の課題

感染状況や政府の方針が変化しているため, 感染拡大時期の国内文献に限っていることが研究の限界である。今後は, マスクの影響に関する研究の継続的な検討, 乳幼児を育児中の親のマスクの影響の認識に関する実態調査, 啓発の効果検証, 看護職への啓発効果検証などが課題である。

VII. 結論

新型コロナウイルス感染症流行下における保護者や保育者のマスク着用による乳幼児への影響と対応について明らかにすることを目的とした。医中誌WEB版, CiNii, ハンドサーチにより会議録を除く新型コロナウイルス感染症, マスク, 発達をキーワードとし, 2020年から2022年に発表された文献を検索した。国内10文献を対象に文献検討を行った。その結果, 以下のことが明らかになった。

1. 研究動向

調査研究論文の対象者は5件とも保育者であった。親を対象とした認識の実態把握の必要性が示唆された。

2. マスクの影響

マスク着用の実態への影響, 愛着形成への影響, コミュニケーション・共感性の発達への影響, 咀嚼力の発達への影響, 言語発達への影響の可能性が考えられた。

3. 対応

影響に関するエビデンスについて明らかではないため, 継続した研究が必要であった。

具体的な対応は, 身体接触, 感情のやりとりの工夫, 透明素材のマスク, 家庭内での表情豊かなコミュニケーションがあげられた。

利益相反

本研究による利益相反は存在しない。

文献

青木紀久代 (2020): 新型コロナウイルスと心理職 子ども・家族のケアを考える「コロナ禍」と子育て支援現場のこれから, 子育て支援と心理臨床, 19, 7-10.

朝日新聞デジタル (2020): 「WHO, マスク着用の指針を改訂 一般に広く着用を推奨 [新型コロナウイルス], <https://www.asahi.com/articles/ASN663J3HN66UH-BI005.html> (アクセス日2022.12.1)

麻生典子 (2022): 親と子の身体接触と心のつながり, 子育て研究, 12, 15-22.

Freiberg A, Horvath K, Hahne TM, et al. (2021): Impact of wearing face masks in public to prevent infectious diseases on the psychosocial development in children and adolescents: a systematic review, *Bundesgesundheitsblatt Gesundheitsforschung Gesundheitsschutz*, 64 (12), 1592-1602.

Gori M, Schiatti L, Amadeo MB (2021): Masking Emotions: Face Masks Impair How We Read Emotions, *Front Psychol*, 12, 669432.

カラダノート (2022): 「子どものマスク着用に関する意識調査」, <https://corp.karadanote.jp/archives/4791> (アクセス日2022.10.7)

厚生労働省 (2020a): 「新しい生活様式」の実践例, https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000121431_newlifestyle.html (アクセス日2022.10.7)

厚生労働省 (2020b): 保育の現場・職業の魅力向上検討会 令和2年9月17日, 第6回, 保育士の現状と主な取組, 2, <https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000672997.pdf> (アクセス日2022.10.15)

厚生労働省 (2022a): データからわかる—新型コロナウイルス感染症情報—, <https://covid19.mhlw.go.jp/> (アクセス日2022.10.7)

厚生労働省 (2022b): マスク着用について, https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kansentaisaku_00001.html (アクセス日2022.10.7)

厚生労働省 (2022c): 保育所等における新型コロナウイルスへの対応にかかる Q & A について (第十五報) (令和4年5月25日現在), 厚生労働省子ども家庭局保育, [seisakunitsuite/bunya/kansentaisaku_00001.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kansentaisaku_00001.html) (アクセス日2022.10.7)

松村秋芳 (2021): 【進化するヒト～変貌する社会と変わりゆく身体～】 行動様式の進化と環境のかかわり コロナ後の新しい生活様式の探求とその着眼点, 子どもと発育発達, 19(2), 116-122.

明和政子 (2021a): コロナ禍での子育てと乳児の発達成長, 臨床助産ケア:スキルの強化, 13(3), 92-96.

明和政子 (2021b): 霊長類の比較発達心理学 コロナ禍でのヒトの育ち, 発達, 42(165), 95-102.

明和政子 (2022a): 【コロナ禍の子どもたち】 コロナ禍でのヒトの脳と心の発達, チャイルドヘルス, 25(2), 99-102.

明和政子 (2022b): マスク社会が危ない 子どもの発達に「毎日マスク」はどう影響するか?, 12-18, 宝島社, 東京.

七木田方美 (2021): 保育者のマスク着用が保育や子どもに与える影響 COVID-19禍による, 保育と保健, 27(1), 13-17.

日本小児科学会 (2021): ガイドライン・提言 子どもおよび子どもに関わる業務従事者のマスク着用の考え方, https://www.jpeds.or.jp/modules/guidelines/index.php?content_id=128 (アクセス日2022.10.7)

日本小児感染症学会 (2022): 保育園における新型コロナウイルス感染症に関する手引き第3版, 日本小児感染症学会, 新型コロナウイルス感染症に関するワーキンググループ.

日本リサーチセンター (2022): 【新型コロナウイルス感染症自主調査】 新型コロナウイルスに対する予防策として, 「公共の場ではマスクを着用する」の回答率～世界14か国

を比較~, <https://www.nrc.co.jp/nryg/220526.html> (アクセス日2022.10.7)

西館有沙 (2021): With&After コロナ禍での育児 (第2回) 行動が制限されるコロナ禍での子育て 自粛中の子育てにおいて親が困ったこと, 学んだこと, 臨床助産ケア:スキルの強化, 13(5), 66-70.

西館有沙 (2022): With&After コロナ禍での育児 (第4回) (最終回) コロナ禍で子どもの育ちを支える取り組み, 臨床助産ケア:スキルの強化, 14(1), 65-69.

野澤祥子, 淀川裕美, 中田麗子, 他 (2022): 保育・幼児教育施設における新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響についての検討 2020年度・2021年度の動向と調査結果から, 東京大学大学院教育学研究科紀要, 61, 331-351.

及川智博, 中島寿宏, 岩谷 樹, 他 (2022): 保育者たちが振り返る“COVID-19パンデミック”の1年, 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 140, 117-154.

大豆生田啓友 (2021): 【ウイズコロナ×保育・教育の多事争論】みえてきた保育・教育をめぐる問題 ウイズコロナから考える保育の質の向上, 発達, 41(164), 24-32.

澁井展子 (2021): コロナ禍における保育園での乳児保育に寄せて, 東京都医師会雑誌, 74(6), 476-479.

下里里枝 (2022): 保育者のマスク着用が, 子どもとのコミュニケーションに及ぼす影響について, 教育総合研究叢書, 15, 57-64.

首相官邸 (2022): 新型コロナワクチンについて, <https://www.kantei.go.jp/jp/headline/kansensho/vaccine.html> (アクセス日2022.10.7)

東京新聞 (2020): <新型コロナ>「感染予防にマスク不要」WHO指針 手洗い「最も効果的」(2020年3月2日), <https://www.tokyo-np.co.jp/article/26305>(アクセス日2022.10.7)

横井良憲, 鈴木 裕 (2021): 新型コロナウイルス感染症 COVID-19の中での保育施設の課題, 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要, 6, 19-26.

全国保育園保健師看護師連絡会 (2021): 保育現場のための新型コロナウイルス感染症対応ガイドブック第3版, 8.